

春興しゅん きやう

武たけ

元げん

衡けい

楊柳陰陰細雨晴ようりゆういんいんさいうはれたり

殘花落ち尽ざんかおちつじんとして流鶯りやうおうを見る

春風一夜郷夢しゅんぷういちやきやうむを吹かき

又春風またしゅんぷうを逐おいて洛城らくじやうに到いたる

【作者】武元衡(七五八〜八一五年)は、中国・唐の詩人。河南緱氏(こうし、河南省偃師の南)の出身。字は伯蒼。

徳宗の七八三年の進士。徳宗に才能を認められ、比部員外郎・右司郎中・御史中丞を歴任。順宗朝では権臣・王叔文に従わなかった為、降職されたが、憲宗の八〇七年には門下侍郎・同中書門下平章事(宰相)に至った。同年、宰相のまま劍南西河節度使に任ぜられて蜀に赴き、七年間、蜀に滞在した。淮西節度使(河南省汝南)・呉元済が反乱を起こした時、憲宗から全てを委任されて討伐を画策したが、呉元済派の朝臣の放った刺客に暗殺された。『武元衡集』三巻がある。

【通釈】柳のはが小暗(おぐらく)く茂り、小雨もあがつて、残の花も散りつくし、飛びかう鶯の姿が見える。

夜通し吹く春風に、かき立てられたふるさとへの思い、その春風のあとを追って、らくようへとはせる。